日本産業衛生学会東海地方会
地方会ニュース

発行所　東海地方会ニュース編集事務局
〒541-0056
大阪府大阪市中央区久太郎町 2-1-25　JTB ビル 8F
株式会社 JTB コミュニケーションデザイン
事業共創部　コンベンション第二事業局内
FAX：06-4964-8804
発行責任者　斉藤　政彦

題字　皿井　進筆

巻　頭　言

第 31 回日本産業衛生学会全国協議会を開催して

第 31 回日本産業衛生学会全国協議会　企画運営委員長
三重大学大学院医学系研究科公衆衛生・産業医学分野教授　**笠　島　　茂**

この度、第 31 回日本産業衛生学会全国協議会（令和 3 年 12 月 3 日～5 日）を、三重県総合文化センター（津市）を現地会場として開催しました。懸念された新型コロナウイルス感染症第 5 波は終息に近づいていましたが、万全を期して、現地会場参加者数の上限を、収容定員の 50%とし、オンライン配信を併用するハイブリッド方式を用いました。結果として、1700 人を超える多数の方に参加頂けました。ご尽力賜りました東海地方会の先生方、並びに演者の先生方に深くお礼申し上げます。以下、既に他でも取り上げましたが、本会概要のご紹介でもって巻頭言にかえさせて頂きます。

本会テーマは、『経済社会と健康：ポストコロナの産業衛生を考える』としました。会長講演で、産業衛生の現場に及ぶコロナ感染症のパンデミックの影響を制御するためには、その社会経済的要因と対策のあり方を解明する必要があること、それには国勢調査と人口動態統計等を個人単位でリンケージして解析するのが望ましく、その先行例である英国のリスク統計（ONSLS）を本邦でも実現すべきと提唱しました。引き続き、基調講演では国の新型コロナ対策の要を担う尾身茂先生に登壇賜り、『COVID-19 のこれまで、そしてこれから』と題して、パンデミックとその対策について現状と課題を詳説頂きました。さらに、新型コロナ感染症に関わる先生方にお願いし、メインシンポジウム 2 題、特別講演 8 題、教育講演 3 題、ワークショップ 1 題を含む 50 題からなる企画と、103 題の一般演題（査読付き）を配置し、今後のコロナ感染症と経済社会に関わる活発な質疑応答を頂きました。

中でも、セントレア国際空港の犬塚力代表取締役社長の特別講演は、空の玄関口におけるパンデミックへの対策について多くの貴重な証言を含み、最前線に立つトップとして、切迫した状況と今後の課題の呈示とともに、産業衛生関係者への切実な協力要請がありました。フロアとの熱い質疑応答に、私も、身を乗り出すように聴き入りました。また、北大、塩野義、島津のグループによる教育講演で、最先端の高精度 PCR 検査法を用いた下水疫学による職域集団検査が発表されるなど注目すべき数多くの講演を拝聴させて頂けました。

特集　第 31 回日本産業衛生学会全国協議会

第 31 回日本産業衛生学会全国協議会　開催報告

運営実行委員長／シャープディスプレイテクノロジー(株)三重事業所　産業医　**酒　井　秀　精**

2021 年 12 月 3 日から 5 日の 3 日間にわたり、三重県総合文化センターにて第 31 回日本産業衛生学会全国協議会を開催させていただきました。新型コロナウィルス感染症(以下新型コロナ)の感染拡大が懸念されましたが、流行の谷間にあたり無事、盛会に開催することができました事を、ここにご報告申し上げます。ご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

全国協議会を三重で開催することになりましたのは 2019 年のことであり、新型コロナはまだ姿を見せてはおりませんでした。しかし翌 2020 年初頭には流行が始まり、緊急事態宣言が出され旭川の学会は中止となり鹿児島の全国協議会はすべてオンラインとなりました。このような状況の中、開催形式についてどうするかが大きな問題でした。松本の学会はハイブリッドとなり、これにならいハイブリッド開催とすることを決定しました。

しかしながら今までの学会開催と違って初めてのことがとても多く、学会運営業者との打ち合わせも遅々として進まず、一時は本当に開催できるのかと不安でいっぱいでした。そんな中、事務局の獅子奮迅の働きによりようやく開催にこぎつけました。

新型コロナ感染予防対策も事前に十分検討し、現地参加人数を 800 人に制限する事としました。しかし、初日は受付や産業医の単位シールの交換などで密になる部分がありましたが、適切に改善を行い翌日は比較的スムースに対応ができました。参加人数は現地参加 734 名、オンライン参加 926 名の計 1660 名でした。

改めてまして、座長、演者の労をとっていただいた方々、会場の運営業務にご尽力いただきました東海地方会の皆様、そしてボランティアスタッフの方々に厚く御礼申し上げる次第です。

本当にありがとうございました。

閉会式にて

メインシンポジウム「ポストコロナの現状と今後の産業衛生の展望」を聴講して

聖隷健康診断センター　**近　藤　　祥**

メインシンポジウム 1「ポストコロナの現状と今後の産業衛生の展望」をオンデマンドで聴講しました。本シンポジウムでは、5 名の演者より、「ポストコロナの経済（伊藤元重先生）」、「ワクチン開発と今後の課題（野阪哲哉先生）」、「地域における呼吸器感染症の疫学と対策における課題（谷口清州先生）」、「社会科学的アプローチ：流行の本質と施策の意義（川村孝先生）」、「コロナで浮彫になった課題とこれからの医療政策（羽生田俊先生）」と題したご講演の後、意見交換が行われました。中でも特に印象に残った 2 つの演題に絞り、報告いたします。

「ポストコロナの経済」では、JR の緻密かつ複雑な交通システムや日本の社会保障制度・医療体制を例に挙げ、新型コロナウイルスの感染拡大が与えた影響の大きさや変化へのスピードという観点で話がありました。新型コロナウイルスによる大きな変化に対してネガティブに捉えるのではなく、今後の人口減少や在宅

ワークの増加といった近未来への対応が急速に進んだポジティブなきっかけと捉えるといった考え方が印象的でした。この考え方は、自分自身や産業保健で関わるコロナ禍でストレスを感じている従業員等に向けて、コロナに対する向き合い方やモチベーションの保ち方にもつながると考えます。また、「ワクチン開発と今後の課題」では、国産経鼻噴霧型ワクチンの話題があり、その特性として、注射針が不要のため医師や看護師・保健師等のマンパワーや医療資源が乏しい国や地域においても供給・活用が可能であること、BC-PIV ベクター技術により既存のコロナウイルスだけでなく、今後新たに変異が生じた場合であっても３週間程度の短期間で対応したワクチン開発が可能であること、様々なウイルスによる感染症に対しても利用可能であることが挙げられており、早期の実現が期待されます。オンデマンド配信は当日現地参加できない人には非常にありがたい仕組みですが、シンポジウムを通じて得られた日々の活動に対するアイディアや熱意を直ぐに議論・共有することができません。来年はぜひ現地参加したいと思います。

特別講演「ポストコロナ時代における産業保健の戦略」を聴いて

富士電機（株）三重工場　健康管理センター　保健師　**広　瀬　沙　織**

今回、兵庫医科大学の後藤章暢先生のご講演を聴かせていただきました。第二次世界大戦とコロナ禍を結び付け、戦略が勝利と成功を導くというお話をしていただきました。また、日本の敗戦と政府のコロナ対策（マスク配付、ワクチン接種）を例に挙げ、日本人の国民性の特徴を、各国のジョークを交えて楽しく聴かせていただきました。その中でも、司令塔が一元化されていない事や、忖度した都合を優先するような情報の軽視、縦割り構造と前例や旧慣に非合理なまでにこだわる国民性は、地域や企業という単位でも同じことが言えるのではないかと感じました。それは私個人の中にも根深くあり、自身と周囲の変革には相当のエネルギーが必要なことも容易に想像できました。

産業保健活動の主目的は、「労働条件と労働環境に関連する健康障害予防と、労働者の健康の保持増進、ならびに福祉の向上に寄与する」ことにあります。医療従事者、労働者、企業、地域それぞれが考える産業保健活動はイコールではありませんが、世界がコロナで激変した今、喫煙、肥満、糖尿病は重症化リスクとみなされるため、健康に対する価値観は間違いなく高くなっています。またコロナ禍でテレワークが急激に進み、働き方やライフスタイルが大きく変化した結果、労働者の健康保持増進は地域との連携が欠かせません。ニューノーマルな時代の今だからこそ、「生涯切れ目のない健康支援を目指した戦略」を企業、地域と共に再考すべき時であり、それを実行するチャンスだと決意を新たにしました。

末尾になりましたが、日本産業衛生学会全国協議会に参加し、聴講する機会が得られたことに大変感謝しております。今後も自己研鑽に励み、戦略をもって産業保健活動に邁進してまいりますのでご指導のほどよろしくお願いいたします。

特別講演 5「ポストコロナにおける職場のメンタルヘルス」を聴講して

三菱重工業(株)大江西健康管理チーム　科部長　石 川 浩 二

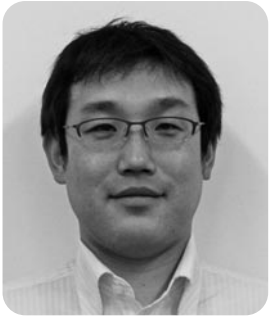
藤田医科大学　精神神経科学の岩田仲生教授に講演頂きました。

①コロナ禍とこころの遠隔評価・相談システム紹介、②医療者側の視点から、③産業保健側の視点から、について講演されました。①については、自殺者の推移を示され、特に女性が今回の影響を受けて増えたこと、コロナの流行が落ち着きつつある 12 月現在、自殺者も例年同様の数に落ち着いてきたことが示されました。岩田先生もメンバーの一人として開発した、AI を活用したコロナ禍のこころの遠隔評価・相談システム「KOKO-ROBO」も紹介されました。認知行動療法での対応、医療機関への受診、相談電話への誘導などへつなげられる素晴らしいツールでした。まだ研究段階ですが、今後全国展開される予定とのことです。②について、DSM 診断基準、うつ病の遺伝疫学などを紹介されました。うつ病には 3 つの遺伝要因群があり、抑うつ気分・興味意欲減退・無価値観には今の抗うつ薬の効果があること、精神焦燥・集中力低下・希死念慮へは薬物効果はなく、入院など安静が基本であること、睡眠障害・倦怠感も、現状の薬物効果はなく、メチルフェニデートなどの効果の可能性があるとのことでした。うつ病の遺伝要因と環境要因は 4：6 であること、うつ病の遺伝子が、2019 年には 102 個判明されており、近い将来には、その数は 1000 個にも及ぶとのことでした。早期診断やスクリーニングなどにも応用される可能性が考えられます。③については、産業保健スタッフが、事例対応の初期対応でストレス対処のスキルを指導すること、対応の心構えとして、記録・報告と守秘義務の関連等、正しい知識を持つこと、医療機関の情報を持つこと、相談しやすい相手となることが必要とまとめられました。

最後に、述べられた「休業は主治医でなく会社が決めること」という内容に大変インパクトを受けました。診断書を主治医に書いて頂けるかどうかについては、実際の勤務状態や職場での事実とともに依頼すればよい、という回答で締めくくられました。大変収穫の多い講演で、ぜひまたの機会に応用編を聴講したいと思います。

第 31 回日本産業衛生学会全国協議会での教育講演を拝聴して

ヤマハ株式会社　産業医　松 木 稔 久



2021 年 12 月 3 日から 5 日までの 3 日間の会期で、三重県総合文化センターにおいて、笹島茂先生を企画運営委員長として日本産業衛生学会全国協議会が開催されました。私は、1 日目の午後から参加させていただき、多くの講演・シンポジウムを拝聴することができました。その中でも、教育講演は抱いておりました疑問が解消され、参考になりましたのでご報告いたします。

教育講演 2 では、小野真理子先生（独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生研究所）より「溶接ヒュームとマンガンに関する政省令の改正について－その背景と職場での対応の考え方－」というテーマで、厚生労働省の化学物質による労働者の健康障害防止措置に係る検討会での内容を踏まえて，分かりやすくお話しいただきました。

2021 年 4 月の改正では、塩基性酸化マンガンと溶接ヒュームを第 2 類特定化学物質として位置づけられ、特殊健診の実施や作業主任者の選任などが義務付けられました。この改正の背景には、米国産業衛生専門家会議（ACGIH）と欧州委員会科学委員会（EC）での粒径別の曝露限界値が勧告されたことを踏まえた管理濃度の見直しがあり、塩基性酸化マンガンの有害性の報告、溶接ヒュームを特定化学物質としての位置づけすることになった経緯を説明されました。溶接ヒュームが独立した特定化学物質として位置づけられるのは、マンガンによる神経機能障害のほか、肺がんのリスクがあり、国際がん研究機関（IARC）発がん性分類で Group 1 に分類され、マンガン及びその化合物の毒性や健康障害と異なる可能性が高いことが理由である説明は、本講演の前に抱いておりました疑問が解消された瞬間でした。

17 時 45 分からの当日の最終プログラムであるにもかかわらず、多くの方が拝聴されており、演題への関心の高さを実感いたしました。

産業看護部会シンポジウム
「これからの地域・職域連携～ポストコロナのニューノーマル～」に参加して

豊橋鉄道株式会社　総務部　保健師　**赤　川　景　子**

2021 年 12 月 3 日、第 31 回全国協議会において、産業看護部会シンポジウム「これからの地域・職域連携～ポストコロナのニューノーマル～」が開催されました。四日市看護医療大学の後藤先生、キオクシア（株）の髙﨑先生が座長を、四日市看護医療大学の柴田先生が指定発言を、地域・職域連携ガイドライン策定に携わった人間環境大学の巽先生、健診機関の立場から長谷川先生、行政の立場から中村先生、企業の立場から小職がシンポジストを務めさせていただきましたのでご報告します。

巽先生のご発表では、新ガイドラインのポイントと産業保健・看護との関わりについて示されました。次に、長谷川先生からは、コロナ禍でのご経験を踏まえて地域・職域連携を推進するために健診機関としてできることを、さらに中村先生からは、行政保健師の立場から地域・職域連携推進協議会事務局として実施した工夫や活動について発表されました。小職からは、弊社の地域・職域連携の実際について発表しました。

今回のシンポジウムを通して、行政と企業が良きパートナーとして協力しあうためには、「顔の見える関係づくり」を行い、どちらかに依存するのではなく「行政と企業が win-win の関係性」を構築することが大切だと感じました。今回、中村先生が「普段からの連携の基盤がコロナ対応における連携につながった」とお話されており、地域・職域連携は健康危機対応時にも役立つものだと再確認しました。今後は、企業内で完結する健康管理から、地域の一部である企業が行政と連携しながら取り組む健康管理へと変化することが求められていると思います。コロナ禍で顔の見える関係づくりが難しい昨今ではありますが、「労働衛生のしおり」を手土産に行政との関係づくりを進める企業が増えていくことが、「生涯切れ目のない健康支援」実現のための第一歩になるのではないかと感じました。このような機会をいただきましたことに感謝いたします。

産業衛生技術シンポジウム
「テレワーク・在宅勤務における労働環境の問題と今後の課題」

名古屋市立大学大学院医学研究科　准教授　**榎　原　　毅**

本シンポジウムは、コロナ禍において普及が加速したテレワーク・在宅勤務の問題点を明確にし、産業保健従事者が解決すべき点の議論と共有を目的に企画されました。座長の中原浩彦先生（ENEOS 株式会社）の企画趣旨説明の後、3 名の講師より発表がありました。齊藤宏之先生（労働安全衛生総合研究所）からは「コロナ禍に伴う在宅勤務における作業環境の諸問題の概要」として、JACSIS study の大規模アンケート調査結果を中心にコロナ禍の在宅勤務実態が紹介されました。テレワークの実施状況には地域差があること、パンデミックから一年半が経過した時点においても依然として在宅作業環境の整備が追いついていない実態が示されました。続いて、筆者からは「人間工学分野で現在扱われている Working From Home（WFH）研究と社会実装の動向」として、日本人間工学会が作成し、国際

人間工学連合から電子書籍として無料公開されている通称「7 つの人間工学ヒント集」についての紹介と、その開発経緯を人間工学アプローチの変遷と共に紹介しました。最後に佐々木那津先生（東京大学）からは、「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下におけるテレワーク・在宅勤務労働者の精神健康：文献レビューおよびオンラインコホート調査の結果より」と題し、COVID-19 前後の文献レビューの紹介および労働者オンライン調査(E-COCO-J)の結果が紹介されました。COVID-19 流行後の研究はいまだ十分とは言えず、メンタルヘルスやパフォーマンスへの影響に関する結果は一貫していないこと、また、E-COCO-J 研究の結果からは在宅勤務が合っているという個人の感覚を尊重することが健康と生産性の維持に寄与する可能性があること等が紹介されました。その後のフロアとの討論では、業務の平準化（在宅勤務できる人・できない人の不平等）に対する対応、テレワークに関する確固たるエビデンス・コンセンサスが得られている点・矛盾がある点などについて多数質問があり、大変盛り上がった意見交換が行われました。

産業歯科保健部会シンポジウム「ポストコロナ時代の産業歯科保健を考える」

愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座　准教授　**加　藤　一　夫**

産業歯科保健部会シンポジウムは、メインテーマ「経済社会と健康：ポストコロナの産業衛生を考える」に合わせ、「ポストコロナ時代の産業歯科保健を考える」というタイトルで企画開催されました。

新型コロナ感染症の蔓延を中心とした昨今の社会情勢・労働環境のもと、歯科保健の観点からも、コロナ感染を恐れての歯科医院への受診抑制や巣ごもり生活による不規則な食生活からの歯科疾患の発症や重症化のリスク、心因的な問題に起因する口腔領域の不調、あるいは自宅等での情報機器作業における不適切な姿勢や疲労等による口腔領域への影響といった健康事象が危惧されます。

そこで、本シンポジウムでは、先ず橋本和佳先生（愛知学院大学 歯学部冠・橋義歯学講座）より、「情報機器作業が口腔領域に与える潜在リスク」として作業姿勢や食いしばりによる顎関節や咬合への影響について、また、佐藤理之先生（日本歯科医師連盟常任理事）には、開業医のお立場から、「新型コロナ感染症に対する歯科医院の感染予防対策」として、歯科医院に安心して受診してもらうための様々な取り組みをお話しいただきました。続いて、吉成伸夫先生（松本歯科大学 歯科保存学講座）からは、「巣ごもり生活と口腔の健康」と題して、特に新型コロナ感染症が歯周病を中心とした口腔の健康に与える影響についての様々なエビデンスを紹介していただき、最後に、横井基夫先生（名古屋市立大学大学院 医学研究科 生体機能・構造医学専攻 感覚器・形成医学講座 口腔外科学分野）より、「コロナ禍における口腔関連のメンタルヘルス」と題して、これまでの臨床経験から口腔関連の不定愁訴として頻度の高い舌痛症について語っていただきました。

今回の全国協議会では、終了後もオンデマンド配信を利用して視聴できました。コロナ禍で想定される労働者における口腔領域の様々な健康事象について、産業保健スタッフの間で広く共有する機会にできたならば幸いです。

ダイバーシティ推進委員会フォーラムで考えたこと

四日市看護医療大学・大学院 看護医療学部看護学科　准教授　**後　藤　由　紀**

第 31 回日本産業衛生学会全国協議会（津）では久しぶりに皆様方にお会いし言葉を交わし、対面の良さを感じた学会でした。

東海地方のダイバーシティ推進委員として、委員長の西賢一郎先生（ジヤトコ株式会社）と共にダイバーシティ推進委員会フォーラムの座長を務めさせていただきました。

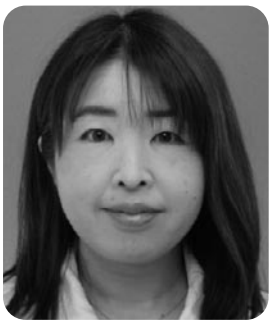
会員が考える学会活動の活性化―学会のオンライン開催について―をテーマに先生方からそれぞれの学会参加についてお伺いしました。子育て中はオンライン学会により参加のハードルが下がるといったメリットは、子育てほぼ卒業の私も納得でした。オンライン学会は学びたい人誰もが学ぶチャンスをつくる、ダイバーシティ推進には欠かせないという思いを強くしました。また介護経験のある先生の発表も、近い未来のロールモデルとなり大変興味深く拝聴しました。ネットワークをつくって ICT に強くなってワークライフバランスをとりながら自己研鑽に努めたいと思いました。オンラインに不慣れな先生が、徐々にオンラインに慣れていく過程もクスっと笑いながらお聞きしました。カメラオンがわからず会議中にお菓子を食べている姿を見られて・・・といった失敗談は私自身も経験があり、お気持ちを察しました。遠方からの学会参加もオンライン参加で交通費・宿泊費・時間の節約になるという話も納得でした。

一方、今回の現地参加で沢山の方と名刺交換し、交流させて頂いた事、雑談からの気づきなど沢山のメリットを感じました。オンライン参加と現地参加のいずれにもメリットデメリットありますので、選択できる様なハイブリット開催が継続できればと思います。ライフステージにおいて様々な背景がある会員の自己研鑽の機会の担保、叡智を次世代に繋ぐためにもダイバーシティ活動は重要だと改めて考えました。

フォーラムの様子は、YouTube でも限定配信で視聴することができます（https://www.youtube.com/watch?v=TF-8s6tMPyo）。オンデマンドで見逃した方、是非ご覧になってください。

学会ボランティアに参加して

住友ファーマ(株)鈴鹿工場　保健師　**井　上　さなえ**



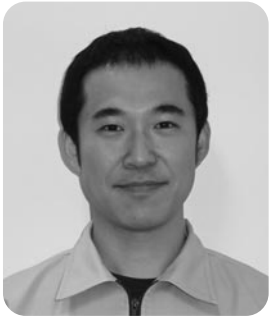
このたび、三重県総合文化センターにて、2021 年 12 月 3 日(金)～5 日(日) に開催されました第 31 回 日本産業衛生学会全国協議会の学会ボランティアに参加させていただきましたので、ご報告させていただきます。

私は、これまで学会ボランティアの経験がなく、いつも参加者としてお世話になって参りました。今回の開催会場は、私の地元津市の会場ということもあり、日頃お世話になっている先生方や学会に少しでもお役に立つことができれば…という思いで、微力ながら、学会ボランティアスタッフ参加に手上げさせていただくことにしました。事前にたくさんの先生方が様々な準備・打ち合わせなどを重ね、会が成り立っているだろうというイメージは持っておりましたが、実際に Web 打ち合わせに参加させていただくと、想像以上に当日に向けた役割や動き方の確認など、我々ボランティアスタッフが困ることが無いよう非常に丁寧なご説明とお気遣いをくださっているという印象を持ちました。また、当日は、クロークの役割を担当させていただきましたが、馴れない手元作業や段取りなどもある中、池田先生を中心に御指導下さいました先生方のお陰で、大きなトラブル等起きることもなく、荷受け・荷物出しが行えました。また、そのクロークと兼務で日本医師会認定産業医研修会の「認定シール引換証」の受講証明の押印作業も担当させていただきましたが、その際も石川先生・山本先生に大変丁寧に御指導いただき、学生ボランティアスタッフの皆さんと共にこちらも問題なく、担当させていただくことができました。以上の経験より、学会は、この様なボランティアスタッフを担ってくださる先生方がいらっしゃるお陰で、毎回気持ち良く参加させていただけていることを改めて実感できる貴重な経験となりましたし、今後も積極的に学会ボランティアに参加したいと思いました。

受　賞　記　事

ポスター優秀賞　受賞のご報告

東芝テック株式会社　総務部総務企画室　保健師　**高　橋　一　矩**



2021 年 12 月に開催されました、第 31 回日本産業衛生学会全国協議会におきまして、ポスター優秀賞を授与いただきました。大変光栄に思うと同時に、身の引き締まる思いです。

私は、2011 年に三重県四日市市で産業保健師としての第一歩を踏み出しました。2014 年に静岡県へ異動する際に、職場の先輩から「焦らず、10 年かけて事業所に合った産業保健体制を構築できるように。」と、激励の言葉をいただいた事を今でも覚えています。現事業所での在籍期間は 10 年経っていませんが、今回の発表は保健師 10 年目の活動をまとめたものです。

静岡への異動後、四日市での取り組みを思い出し、模倣しながら活動をしてきた私にとってはもちろん、事業所としても動画配信によるメンタルヘルス教育、さらに主任層へのアプローチが初めてということもあり、受講者からどのような反応が出てくるか不安でしたが、受講後に寄せられたご好評の言葉が何より嬉しく、自信となりました。

また、自身の保健師活動の原点となった三重県で開催される学会での受賞だったことや、同じくポスター優秀賞（研究部門）を受賞されたのが、出身校の先生方であったことなど、受賞したこと以外にも個人的に喜ばしいことが重なりました。

コロナ渦により、数年前に思い描いていた産業保健の取り組みは、路線変更を余儀なくされていますが、様々な制限があったからこそ、初めての取り組みにチャレンジするマインドが、事業所に生まれたと感じました。これを好機と捉え、更なる発展につなげられる様に邁進したいと思います。

最後になりましたが、ご指導いただいた藤本先生をはじめ、諸先輩方、日々の産業保健活動をご支援くださる皆様に、心より感謝申し上げます。

開　催　報　告

日本産業衛生学会 東海地方会 産業衛生技術部会　第 13 回特別企画「労働衛生の将来の方向性」を考える講演会に参加して

株式会社富士清空工業所　代表取締役　**奥　田　篤　史**

令和 4 年 1 月 22 日に「労働衛生の将来の方向性」を考えるというタイトルで、特別企画が開催されました。今回の特別企画は「労働衛生の将来の方向性」をテーマに 2 題の講演がありました。

1 題目は、「化学物質管理の大転換　法令準拠型から自律的な管理へ」というテーマで（独）労働者健康安全機構の城内博先生にご講演いただきました。城内先生は厚生労働省の「職場における化学物質等の管理のあり方に関する検討会」の座長を務められており、今回の講演は、その検討会の報告書についてご説明いただきました。

検討会報告書の概要を端的に申し上げますと、「法規制型だった化学物質管理を自律管理型に変えていく」というものになります。これまで化学物質を扱うには、特定化学物質障害予防規則などの各種規則に基づいた画一的な措置が必要でした。しかし今後は事業所自ら行ったリスクアセスメントの結果に基づき、措置を行うことが求められるようになるそうです。検討会報告書の詳細については厚生労働省の web サイトをご覧ください。

この制度改正が実施されると、「作業頻度が少ない」あるいは「少量しか扱わない」というような事業所は、環境改善のための措置を作業のリスクに応じたコンパクトなものにできる可能性があり、柔軟な対応ができ

る様になるそうです。これはある意味、規制緩和になるかもしれません。しかし、ハザードを見抜き、リスクを適切に評価することは大変難しいものです。私たちも労働衛生に携わる者として、より適切なリスクアセスメントが行える様に精進しなければならないと感じました。一方で、もしかすると、リスクアセスメントの際に事業所の恣意が入ってしまう危険性も感じました。まだ、制度の細部は決まっていない様にお見受けしますが、国は、そうならないための自律的管理への移行プランをしっかりと練っていただきたいと思いました。

２題目は、「近未来の重量物取扱管理　ISO11228 改訂について」というテーマで名古屋市立大学　榎原毅先生にご講演いただきました。先生からは、ISO11228：2021 年版で制定された重量物取扱作業を行うときのリスクアセスメントの進め方のご紹介をいただきました。先生からは、ISO では「重量物の重さ、移動距離、上げ下ろしの高さ、作業時間などの要素を基に、その作業におけるリスクの判断基準を算出し、リスク評価を行う」という趣旨の解説をいただきました。厚生労働省の「職場における腰痛予防対策指針」しか把握していなかった私にとって、先生のご講演は大変新鮮なもので、大いに納得いたしました。

今回 2 題の講演を拝聴し、これからは労働災害防止の工夫を企業自らがリスクに応じて行っていくことが求められる時代になったと感じました。本学会は、化学物質管理や人間工学をはじめ、様々な分野の先生がいらっしゃいます。この会が、知の共有の拠点、専門家育成の場となることを期待しています。

第 34 回　産業保健スタッフのための研修会のご報告

東海産業歯科部会　鈴木労働衛生コンサルタント事務所
労働衛生コンサルタント・歯科医師　**鈴　木　史　香**

2021 年度の産業保健スタッフのための研修会を 2022 年 2 月 5 日に開催致しました。対面形式での開催案もありましたが、まだまだ終息が見えない新型コロナウイルスの影響や季節柄の悪天候の可能性を考慮して、今回もオンライン形式(Zoom)で実施致しました。

今回の研修会は、開催企画委員として初めて参加致しました。テーマは、今の世の中を混乱させている『コロナ』および『こころの健康』をスポットに当てることにし、近畿大学法学部の三柴丈典教授に『職場のメンタルヘルスと法』としてご講演をして頂きました。何でも『コロナだから仕方ない』で済ませてはいけない、産業保健スタッフは基礎知識を持ち、職場で活かしていく必要があります。第 1 部の教育講演では現場に役立つ知識を多く学べる大変貴重なものでした。難しいテーマではありますが、『優しさと厳しさの両方が大切』というお言葉がとても印象深いものでした。

また、後半の第 2 部では各部会からの問題提起をいただきました。医部会代表の松葉泰昌先生からはコロナ禍の社員の報告義務に関して、看護部会代表の渡井いずみ先生からは在宅ワークでの労働安全衛生法上の事業者責任に関して、技術部会代表の榊原洋子先生からは学会からの有益なコロナ禍対策の情報発信にまつわる利益相反に関して、歯科部会代表の加藤一夫先生からは（特に小規模事業場での）歯科健診の実施状況に関して問題提起いただき、三柴教授とのディスカッションを通じて様々な角度からの産業保健のあり方を学ぶことができました。第 3 部では三柴教授より参加者の質問も含め QA のエッセンスとしてお答えいただき、さらに知識を深めていく実り多い研修会となりました。

本研修会では 100 名を超える多くの方にご参加を頂きました。アンケート結果の一部を紹介します。参加者のみなさまの満足度としまして、満足が 93%、やや満足が 7%と大変高い満足度をいただいております。また、参加者の職種は医師：17%、保健師：65%、衛生管理者：7%、歯科医師：3%でした。今回の研修会は昨年度に引き続きオンライン形式でしたが、今後の開催形式として同形式を希望される方が 52%でした。研修会終了後も参加者の皆さまより感謝のメッセージを多く頂きました。

オンライン研修会の利点として、移動時間が大幅に省略でき、慣れている人には受け入れやすい、利用しやすいという声をよく聞きます。一方でオンライン形式がまだ定着しておらず、馴染みづらいといった声もあがっております。オンラインも便利ではあるけど、『一方通行感』が否めない、参加者間でのディスカッションができない、対面方式に比べると『距離感』を感じるといった点があります。これらを克服し、次回も満足度の高い研修会を開催できるよう準備してまいります。

第 91 回職場ストレス研究会開催報告

株式会社とうかい産業医オフィス　代表・産業医　**水　口　要　平**

2021 年 11 月 14 日に第 91 回職場ストレス研究会が開催されましたので報告いたします。

今回はオンラインでの実施でしたが 42 名の方に参加いただき、私は世話人および座長として参加しました。

第 1 部では、犬山病院副院長の黒川淳一先生に「メンタルヘルス不調者に対する診断と職場復職支援に関する臨床知見」という演題にて、産業現場にも理解の深い精神科専門医という立場から、疾病性、事例性、復職支援の課題に関するお話を頂戴しました。

まず、適応障害、気分障害を中心に DSM 5 の操作的診断方法の再確認や操作的診断法に内在する課題（安易な診断）や限界（生物学的指標がないことや初診時診断名の可変性等）を紹介いただきました。主治医は、診断名をそれほど厳格に考えておらず、むしろ事例性を意識、重要視されているという話は参加者にも大きな印象を与えました。

次に、復職支援を効果的に進めるためには、事例性を理解する主治医、信頼できる精神科医師や医療機関を持つことや、休復職判断、就業上の措置にあたり主治医と事業場間で診療情報提供書等を用いたコミュニケーションを図り、共通言語をもとに連携を深めることが重要であるとの指摘をいただきました。

最後に、精神科病名診断は主治医の主観による判断に依拠せざるを得ない面があるが、黒川先生は患者の抱える事例性に着目して対応されていること、診断への論拠が目に見えない以上はその理解のための仲立ちはあくまで人と人が繋ぐコミュニケーションに期待する他にないこと、そして、本人がどう治しどう復職したいのかを明確にするのを支援しながら落としどころを見出す仲立ち役が必要であること、これらの治療戦略における文脈を精神科医、産業医や産業看護職、事業場が共有することが復職支援への有効な取り組みになるとまとめていただきました。「十人十色のケースへの対応」への産業保健スタッフの積極的関与の重要性が再確認できた非常に示唆に富むご講演でした。

第 2 部では、ZOOM ブレークアウトルームを用い、８つのグループに分かれ、参加者間の意見交換および親睦を目的とした時間を持ちました。限られた時間でしたがそれぞれの班からの黒川先生への質問（事例性に着目した対応困難事例や事業場内連携の課題等）に対し的確なご回答をいただきました。当日のアンケートでも第 2 部グループワークへの好意的な反応や今後のテーマへの期待も寄せられました。本研究会は 2021 年度より八谷寛代表世話人を中心とした世話人にて運営されており、引き続き地方会会員の日々の活動に資するテーマを選定し研究会を継続する予定ですので、皆様の幅広い参加をお待ちしております。以上開催・参加報告といたします。

リ　レ　ー　エ　ッ　セ　イ

産業保健マインド

ブラザー工業　健康管理センター　保健師　**日　笠　ちはる**

名古屋大学西谷先生からバトンをいただき今回のリレーエッセイを担当します日笠です。私は新卒でブラザー工業に入社し、今年で 14 年目です。産業保健を自分なりに理解し日々活動していますが、今に至るまでさまざまな葛藤がありました。今回は失敗談・つまずき経験を交えながら、私の考える産業保健マインドをテーマにお話します。

産業保健は誰のため？

思い返すと中学生の頃から、誰かをサポートしたい、人の役に立ちたいという想いがずっとありました。大学 3 年生の公衆衛生看護学講義で、産業保健師という仕事をはじめて知り、興味を持ちました。その後、従業員にとって身近な存在である産業保健師に憧れて現職に就きました。入社当時は対会社・対組織に貢献しようという考えは少なく、「従業員のために」という気持ちが強かったように思います。それ故、保健指導では従業員個人の健診データを改善してもらうことに注力し、残業や接待に伴う夜遅い夕食や飲酒を悪と捉えていました。「保健師さんが十分に理解してくれない」と記載された保健指導後のアンケートを見た時にがく然とし、保健医療マインドが自分の中に強くあり、「部分最適」の考えになってしまっていたことに気づきました。それからは学会を通じてさまざまな先生の考えに触れ、近隣他社の保健師さんとつながりを持つ中で考えを整理し、従業員・組織・会社にとって全体最適は何かを考える、産業保健マインドへと変化していきました。

産業保健が健康格差を生む？

自社の従業員・組織・会社に貢献すべく奮闘していた頃、とあるセミナーで「健康の社会的決定要因：SDH social determinants of health」という言葉に出会いました。「健康」は、所得や学歴、仕事、居住地、性別、国籍、人種など、さまざまな健康に影響を及ぼす社会的要因によって形成されています。

このセミナー以降、自社で行っている産業保健は限られた労働者に対するサービスであり、産業保健そのものが健康格差を生んでいるのではないかと考え、悩むことがありました。一方で、産業保健の発展を止めてしまっては、すべての働く人に産業保健サービスが行きわたる未来は永久に来ないことも理解していました。この苦しい時期も、やはり学会での学びや同じ悩みを持つ産業看護職との意見交換が救いとなりました。今では、産業保健を通じて健康格差の解消にどのような貢献ができるだろうか、産業保健師として自分は何を目指したいのかを考えるようになりました。

Change the Future！働く人と社会にハピネスを

これは私が所属する健康管理センターの新ビジョンです。産業医と保健師からなるコアメンバーで検討を始め、その後スタッフ全員で繰り返し議論し、それぞれの想いを寄せ合い 1 年かけて完成にこぎつけました。新しいことに率先してチャレンジする、リーディングカンパニーになる、産業保健が社会的格差をなくす一助となる、社会に貢献する、このような想いが込められています。このビジョンを考える過程で私は多くの刺激を受け、産業保健師として目指すものがより明確になったように感じています。

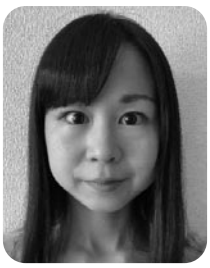
今後も失敗しつまずくこともあると思いますが、産業保健マインドや周囲の先生方とのつながりを大切にしつつ成長していきたいと考えています。これからもどうぞよろしくお願いいたします！ここまでお読みいただきありがとうございました。

次回は富士通株式会社産業医の佐藤博貴様にバトンをお渡しします。新人時代にブラザー工業で大変お世話になりました。佐藤様、よろしくお願いいたします！

会　員　の　声

ご挨拶

三井化学株式会社　名古屋工場　健康管理室　保健師・衛生管理者　**堀　井　琴　美**



はじめまして。三井化学（株）名古屋工場健康管理室の堀井と申します。

私は大学卒業後、健診機関に入社し保健師として約 1 年間働きましたが、学生時代から関心のあった産業保健の分野に携わりたいという思いが強くなり転職し、派遣社員として製造業で産業保健師を約 2 年経験し、その後 2020 年に現在の会社に入社しました。

弊社名古屋工場は名古屋市南部の市街地に立地しており、1951 年、この地において日本で初めて独自技術による塩化ビニール樹脂の製造を開始したのがはじまりです。三井化学の中では小さな工場ですが、屋外型のケミカルプラント、屋内型の樹脂加工プラント、クリーンルームで生産する機能材料のプラント等様々なプラントが併存しています。主要製品は IC 製造プロセステープ、電池用電解液、ウレタンフォーム、不織布等です。現在私は、保健師業務を補助する傍ら、衛生管理者業務を中心に行っています。日々の業務では、職場巡視、作業環境測定、リスクアセスメント、特殊健康診断等に携わっています。産休・育休の取得により、衛生管理者としての実務経験はまだ 1 年程度ですので慣れないことも多いですが、室員や従業員の方からサポートをいただきながら、従業員の方の健康と安全を確保するためにできることは何かを考え業務に励んでいます。

今後、化学物質の自律的管理が進むことでより一層管理の強化が求められますので、知識・経験ともに未熟で至らない点も多いですが、職場の労働衛生に少しでも寄与できるよう、努めていく所存です。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

入会のごあいさつ

錦見環境安全衛生コンサルタント事務所　代表　**錦　見　　端**

はじめまして。2021 年に入会しました錦見と申します。コロナ禍の渦中に入会しましたので、学会の皆様とはまだ直接お会いしたことはありませんが、オンラインのセミナー等ではいろいろ勉強させていただき、感謝しております。

私は大学卒業後、化学会社で医薬品の製造プロセスの研究開発などを担当した後、外資系の製薬会社で EHS（環境安全衛生）の専門家として約 17 年間活動しました。外資系といっても日本法人ですので、日本の労働安全衛生法令に基づく業務は必須ですが、同時に欧米のリスク管理手法についても様々な経験をすることができました。現在、日本の化学物質管理に関する法規制が抜本的に見直され、リスクアセスメントを中心とした欧米流の管理に大転換される渦中にありますが、欧米系の管理を体験してきた者として非常に興味深く見守っています。

また、この外資系企業では、環境保全関係の業務も担当し、環境リスクアセスメントの実施や排水・廃棄物処理施設のマネジメントなども担当しました。その後、名古屋大学で教員として学内の EHS 管理に約 7 年間従事しました。日本の将来を担う学生に、化学物質の安全な取り扱いなどの講義を担当させていただいたことは得難い機会でした。

大学を定年退職後、これまでの外資系を含む複数の民間企業や大学といった様々な組織での EHS 業務の経験が多少なりとも社会のお役に立つのではないかと考え、個人のコンサルタント事務所を開設しました。まだこれからといった段階ですが、コンサルタントと名乗る以上、これからも勉強を続けなければならないと思います。学会の皆様には今後もご指導いただければありがたく思います。

新規入会のご挨拶

ヤマハ発動機（株）　安全健康推進部　安全衛生グループ　産業医　**前　田　悠　智**

はじめまして。この度、日本産業衛生学会に入会させていただきました、ヤマハ発動機（株）産業医の前田悠智と申します。

私は、2018 年に金沢大学を卒業後、愛知県瀬戸市に位置する総合病院にて初期研修を行いました。瀬戸市は古くから窯業が盛んな地域であります。研修中は、粉じん作業歴を持つ間質性肺炎の患者さんを多く診察してきました。診察を通し、急性の経過を辿りうる間質性肺炎の治療の困難さを目の当たりにし、予防医療の重要性を痛感したことをよく覚えています。加えて、仕事が原因で病気を抱えてしまう理不尽さを感じ、そのような人々を 1 人でも少なくしたい思いに駆られました。そのような経緯で、将来のキャリアとして産業医が候補に挙がり、産業保健を勉強するべく、研修 2 年目の夏に、産業医学基礎研修会に参加しました。どの講義も大変興味深かったのですが、特に、従業員の健康管理を経営的な視点で考え、戦略的に取り組む健康経営という言葉に惹かれたことを昨日のことのように覚えています。予防医療は成果として現れにくいことを漠然と懸念していましたが、健康経営に取り組んでいる企業を“見える化”することにより、今後ますます予防医療が世間に浸透するのではないか、産業医の価値が上昇するのではないか、と考え、産業保健の道に進むことを決意しました。

気づけば、産業医になり早 3 年が経ちます。いつの間にか臨床経験より長くなりました。予防医療推進のために産業保健分野に飛び込みましたが、現実は困難な点も多々あります。健康無関心層が多い勤労者に対して、いかに健康に関心を持ってもらうか、日々試行錯誤の連続です。ただ、日頃より、10 名の常勤・非常勤産業医にご指導いただきながら、少しずつ前に進んでいる実感があります。今後とも皆様にはご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

事　務　局　か　ら

地方会理事会

2021 年度第 3 回理事会

日時：2022 年 1 月 15 日（土）10:00～11:45
Zoom による Web 会議

【議題】

I. 前回理事会議事録（案）の確認

II. 協議事項
1）活動費の引き下げについて　2）2022 年度活動方針について　3）広報委員会について　4）化学物質の自律管理について　5）次回の理事会の日程について　6）その他

III. 報告事項
1）第 31 回日本産業衛生学会全国協議会開催報告　2）2021 年度地方会学会開催報告　3）第 34 回産業保健スタッフのための研修会準備状況　4）2022 年度地方会学会準備状況　5）本部理事会報告　6）地方会事務局報告　7）地方会活動方針検討委員会　8）学術研究推進委員会　9）編集委員会　10）研修会企画委員会　11）表彰制度推薦委員会　12）選挙管理委員会　13）部会報告　14）職場ストレス研究会報告　15）各県の活動報告　16）その他報告事項　17）関連学会研究会開催情報　18）その他

2022 年度第 1 回理事会

日時：2022 年 6 月 4 日（土）10:00～12:00
Zoom による Web 会議

【議題】

I. 前回理事会議事録（案）の確認

II. 協議事項
1）2022 年度総会について　2）2023 年度地方会学会について　3）第 35 回産業保健スタッフのための研修会　4）広報委員会の活動について　5）化学物質の自律管理へ向けて　6）役員選挙について　7）次回の理事会の日程について　8）その他

III. 報告事項
1）2022 年度地方会学会準備報告　2）第 34 回産業保健スタッフのための研修会開催報告　3）本部理事会報告　4）今後の学会・協議会の運営について　5）学会時の謝礼について　6）地方会事務局報告　7）地方会活動方針検討委員会　8）学術推進委員会　9）編集委員会　10）研修会企画委員会　11）表彰制度推薦委員会　12）部会報告　13）職場ストレス研究会報告　14）各県の活動報告　15）その他報告事項　16）関連学会研究会開催情報　17）その他

会員状況

2021 年 9 月 1 日～2022 年 3 月 31 日の推移
（2022 年 3 月 31 日現在）

	愛知県	静岡県	三重県	岐阜県	合計
新入･再入会員	11	2	3	2	18
転入会員	11	2	3	2	18
地方会内転入	0	0	0	0	0
退会会員	-37	-11	-6	-2	-56
転出会員	-1	0	-1	0	-2
地方会内転出	0	0	0	0	0
増減	-25	-8	-4	0	-37
本部正会員	534	219	102	44	868

※(　)は学生会員を表す

これからの行事予定

第 32 回日本産業衛生学会 全国協議会
日時：2022 年 9 月 29 日（木）～10 月 1 日（土）
会場：札幌コンベンションセンター
テーマ：連携と協働　-職種、組織の壁を超えて-

第 81 回 日本公衆衛生学会総会
日時：2022 年 10 月 7 日（金）～9 日（日）
会場：YCC 県民文化ホール他（山梨県）
テーマ：公衆衛生イノベーション
原点確認、変革推進

日本産業看護学会 第 11 回学術集会
第 19 回日本ヘルスプロモーション学会学術大会との合同開催
日時：2022 年 11 月 26 日(土)、27 日(日)
会場：産業医科大学ラマツィーニホール
テーマ：健康づくりの新しい潮流
～しなやかなパラダイムシフトに向けて～

第 2 回 東海地方会産業看護部会研修会
日時：2022 年 11 月 23 日（水）
場所：ウィンク愛知 1103 会議室
テーマ：職場のコミュニケーション力アップ
～ほめる技術を学ぼう～（仮）

第 30 回 日本産業ストレス学会
日時：2022 年 12 月 2 日（金）、3 日（土）
場所：一橋大学一橋講堂
テーマ：産業ストレスの研究と実践の新たな幕開け

第 33 回 日本疫学会学術総会
日時：2022 年 2 月 1 日（水）～3 日（金）
場所：アクトシティ浜松
テーマ：総合知による健康・幸福の向上

編　集　後　記

今回のニュースは、約 2 年間のパンデミック感染症との闘いから得た経験や教訓を集中投下した第 31 回全国協議会（三重）の特集記事を多数掲載しています。産業衛生に関わる専門職の日々の活動を支える大変貴重な研鑽機会であり、約 800 名の対面参加者とライブ配信、オンデマンド配信を組み合わせたハイブリッド形式の難しい運営を東海地方会が支えた記録でもあります。100 年に一度のパンデミックの経験は、私たちをより逞しくもしました。

愛知教育大学　榊原　洋子

東海地方会ニュース
編集委員長　：池田友紀子（キヤノン）
副編集委員長：西谷　直子（名古屋大学）
編集委員　　：赤津　順一（日本予防医学協会）
榎原　　毅（名古屋市立大学）
河南　文子（メタウォーター）
後藤　由紀（四日市看護医療大学）
近藤　　祥（聖隷健康診断センター）
榊原　洋子（愛知教育大学）
菅沼要一郎（浜松ホトニクス）
城　　憲秀（中部大学）
山本　　誠（ヤマハ）

東海地方会事務局
〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 2-1-25 JTB ビル 8F
株式会社 JTB コミュニケーションデザイン
事業共創部　コンベンション第二事業局内
FAX：06-4964-8804 E-mail：jsoh-tokai@jtbcom.co.jp

印刷・製本
〒675-0055 兵庫県加古川市東神吉町西井ノ口 601-1
有限会社トータルマップ
TEL：079-433-8081 FAX：079-433-3718